【論　文】

臨床心理学的視点を生かした子育て支援

―私立幼稚園における発達相談の実践より―

稲月聡子（岡山大学学術研究院社会文化科学学域）

本稿では，筆者が行ってきた私立幼稚園における発達相談の実践について改めて振り返り，保育心理臨床において心理職の果たす役割について整理・検討を行った。また，幼保小連携をふまえた今後の活動の方向性についても検討した。

キーワード：子育て支援，保育心理臨床，幼小連携

１．はじめに

子どもの健やかな成長は，その保護者だけでの問題でなく，社会全体の責務であり希望である。日本においても「子ども・子育て支援」関連三法の2015年の施行により，国を挙げて子育て支援の体制が整備されてきた。さらに，幼児教育の質的向上及び小学校教育との円滑な接続について専門的な結果審議を行うため，令和3年7月に中央教育審議会初等中等教育分科会の下に，「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され，「幼保小の架け橋プログラム」の実施等が示された。また，「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」等が策定された（文部科学省，2022）。これは，子供に関わる大人が立場を越えて連携し，架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り，一人一人の多様性に考慮した上で全ての子供に学びや生活の基盤を育むことを目指すものである。このように，幼保小連携においては，地域レベルでの連携を強化していく全国的な取り組みを進めていくと共に，プログラムの実施にあたり，「一人一人の多様性に配慮したうえで全ての子供に学びや生活の基盤を育めるように」といったウェルビーイングの概念に基づいた個別性を尊重する視点が重視されている。

そこで本稿では，筆者が2009年より発達相談員として非常勤で勤務する私立幼稚園での実践を通して，臨床心理学的視点を生かした子育て支援について，幼小連携も視野に入れながら検討してみたい。

そのため，まず発達相談員としての勤務の実際の様子を提示しながら，改めて保育の場において心理職の果たす役割について考察する。次に，幼小連携を視野に入れた今後の活動の在り方について検討する。

なお，幼稚園での臨床心理職の活動については，各自治体の事業名等に伴い，保育カウンセラーやキンダーカウンセラーなど，複数の呼称が使われている。本稿では著者の幼稚園での業務を説明するにあたっては，「発達相談員」を用いることにするが，引用文献で用いられた呼称をそのまま用いている個所もあり，呼称が混在していることを断っておく。

２．発達相談員の仕事の概要

１）著者の１日の仕事の概要

まず，筆者の勤務している幼稚園の施設概要を提示したい。幼稚園は各学年２クラスで構成されており，150 名程度の園児が通っている。送迎にはスクールバスを運行しており，園児は複数の市町村から通ってきている。また，共働き家庭も多いため，時間外の預かり保育も行っている。

園の雰囲気としては，先生がたが学年やクラスを越えて，職員室で子どもの様子をよく共有しており，以前の担任や副担任も，それぞれの

視点で子どもの成長の様子を伝えてくれる。また，支援が必要な子どものサポートをしているスタッフも，筆者がクラスを巡回している間に積極的に担当している園児の対応について質問をしてくれたり，成長の様子を報告してくれたりする。筆者は月 1 回しか勤務できない状況であるため，情報共有や連携がしやすい園の雰囲気をありがたく感じることも多い。また，当園には，心理学についての研修を受け，保育心理職の資格を持つ先生がおり，地域の子育て相談にも広く応じておられるので，園児の家族の状況など，細やかな情報共有もできている。

勤務は月 1 回で，園側の担当者と相談しながら勤務日を前月に決め，毎月発行されるニュースレターの予定表に「発達相談」として掲載してもらっている。相談予約は，最初は保護者に担任から個別に声かけをしてもらい，その後必要があれば定期的に来談してもらうほか，保護者からニュースレターをみて，相談予約が入ることもある。相談内容は，子どもの発達の様子や集団への適応などについてのものが多いが，チックや話し方など，どこに相談したらよいかわからないので，まず幼稚園で相談を，という形で来談されることもある。

以下では，1 日のスケジュールを具体的に示す。まず 9 時前に出勤し，その日の発達相談の予約状況を確認し，各クラスの巡回を始める。子どもたちは制服から体操服に着替え，着替え終わった子どもから自由あそびを行っているので，適宜声かけや着替えのサポートもしながら，子どもの様子を観察する。担任は，連絡帳に目を通したり，その日の活動の準備をしたりする忙しい時間になるので，観察で気づいた子どもたちの特徴や気になる点については，業務を妨げないよう配慮しつつ，副担任にもフォローしてもらいながら，支障のない範囲で声かけをして，その時共有する。担任から，その日に気をつけて観察してほしい子どもが具体的に挙がってきたり，家庭環境に変化があった子どもの情報を教えてもらったりすることもある。山下（2011）の保育カウンセラーの実践報告においても，担任たちとの朝の情報交換がポイントのひとつとして挙げられており，忙しい中ではあるが朝の情報共有は重要なものである。その後，園児たちが在園している 13 時半までは，絵画教室や英語教室，体育など，さまざまな活動を観察しながら，子どもにも適宜声をかけたりしながら，一緒に過ごす。感染対策で食事を共にしない配慮をする前は，給食もクラスで一緒に取りながら，各クラスを巡回し，半日子どもの様子を観察していた。このように，特に午前中は常時どこかのクラスに入り，子どもたちを直接観察している。

園児たちが退園した後は，相談予約の時間をみながら，担任とコンサルテーションを行ったり，預かり保育に入って，引き続き子どもの観察を行ったりして，基本的に 18 時に勤務を終える。

２）発達相談員に求められること

坂上（2015）は，保育カウンセラーの 5 つの役割として，①保育の観察②保護者の個別相談③保護者を対象にした活動④保育カンファレンス⑤地域の子育て支援，を挙げている。以下では，これら 5 つの役割それぞれについて，筆者の実践をふまえ，考えてみたい。

まず①の保育の観察とは，園全体の雰囲気，1 人ひとりの子どもの様子，子ども同士の関係，子どもと先生とのかかわりを観察するものである。また，ときには子どもに関与しながらの観察を行う場合もある。観察にあたって，坂上（同上）は「葛藤場面における子どもの思いや，わかりにくく受け入れがたい行為の背後にある言葉にならない子どもの思いを汲み取りたいと努めて（p. 26）」いると述べているが，筆者も子ども同士のケンカや，かんしゃくを起こしている子どもなどについては，先生がたの介入にも配慮しながら，個別に声をかけ，子どもの思いを聞いたり，気持ちを切り替えられるような声かけをしてみたりしている。また，その際子どもに伝わりやすかった言い方などについては，コンサルテーションにおいて先生がたとも共有するようにしている。この観察によるアセスメントは，心理職の専門性が特に発揮される部分であるため，なるべく多くの時間を割くようにしている。

次に，②の個別相談は，1 枠 30 分で実施している。母親や父親と個別相談を行う時も，場合によっては担任や副担任，支援が必要な子どものコーディネーターを担っている先生に入って

もらう時もある。いわゆる臨床心理面接としてクライエントとお会いしている時に比べて，時間が短いこともあり，子どもを共に育てるチームのメンバーの一人として，その子どもの成長や気になるところを共有し，日ごろの親の工夫や苦労をねぎらい，最後に改めて今後の子育てで大事にしたい視点を確認して終わるといった，ある程度構造化した形を意識して面接を行っている。また，保護者は“かんしゃくをどうおさめればいいか”など，具体的に困っていることの助言を求めてこられることも多いので，日ごろの関わりについて聞いたうえで，具体的な手立てを一緒に考えることもある。また，うまくいっている関わりについては，既に上手に対応できていることを保証し，継続していく方針を共有することもある。

①における観察において，集団のなかでの子どもの様子を心理職が実際にみるだけではなく，直接関わりもすることには，保育心理臨床ならではの面白さと難しさがある。二者で構成される，密室ともいえる空間で過ごす通常の心理面接の時間とは異なり，同年代の子どもや先生がたに見せる子どもの様々な表情を知ることができる面白さがある一方で，筆者自身がそういった形での会い方に，慣れない部分もある。子どもとの距離も，当初はどうすればいいのか戸惑うこともあった。

また，観察において心理職が得る情報は，あくまで集団における子どもについてのものであり，家庭での様子とは全く異なる場合も多いため，保護者との個別相談で，情報をどう共有するのがいいのかも，試行錯誤しながら取り組んできた。特に年少児クラスの保護者は，初めて子どもが集団に入ったこともあり，園での子どもの様子を聞いて驚くことも多く，一方的に子どもの課題を伝えられたように感じ，傷つきを抱えられることもある。そのため最近は，集団の様子と家庭での様子は異なる場合も多いこと，現状では就学に向けて，集団のなかである程度楽しく過ごす力を育てていく必要があると考えていることなどを説明し，その際子どもが感じているであろう困難を，心理職としてはどう考えているかについて，実際の観察の様子も挙げながら，丁寧に説明することを大切にしている。

③は，幼稚園が企画する講演会や懇談会である。筆者は勤務時間の制約もあり，現時点では取り組めていない状況である。会への参加は難しいが，企画段階で案の創出に関わるなど，何らかの形で貢献していくことが今後の課題の一つである。

④は，具体的には「1 日の保育を終えた後で，保育者と保育カウンセラーとでその日の保育の振り返り（p. 27）」を行うことである。筆者も各担任と一定の時間を取り，その日のクラスの観察で気になった子どもの情報共有や支援方針の確認を行っている。筆者がその際大事にしているのは，“今担任が気になっている子ども”について，確認することである。筆者が観察できる時間はわずかであり，集団での活動の際に行動に注目が向きやすい子どもと，よく観察できないまま終わる子どものどちらもがいる。一斉指示の理解や，個別に会話した時の様子など，日々接している担任だからこそ気になることとして挙げられる特徴は，的を射たものであり，年齢があがっていくにつれ，より気になることとなっていくことも多い。そのため，筆者が気づかなかった子どもの様子も，担任から情報収集し，翌月の勤務時に，筆者自身も直接確認し，支援の方針について担任と協議するようにしている。

また，先生がたとのコンサルテーションでは，先生がたをエンパワーメントするような時間になるよう心掛けている。“クラスで気になっている子ども”について情報共有する際にも，先生がたが細やかに園児たちの観察を行っていることをフィードバックするようにし，その日観察して気づいた担任の関わり方の工夫などについても，肯定的なフィードバックを行うようにしている。原口（2017）は，幼稚園における保育カウンセリングにおいては，発達障害傾向を示す園児との関わりに不安を感じ悩んでいる保育者に出会うことが多いことを指摘し，保育者とのコンサルテーションに「共に抱える」，「見立てを伝え共に検討する」「見守る」という三つの段階的プロセスがあることを示している。また，園児理解を進める上で，互いの専門性を尊重しながら，双方向的なやり取りが重要であることも指摘している。

さらに，保育者に対するインタビュー調査に

おいても，保育者はキンダーカウンセラーによる園児に対する心理・発達に関する助言だけでなく，話を聞く，受け止めると言ったカウンセリング的側面の有用性も実感していることが確認されており（原口他，2022），保育者を心理的に支えることも，発達相談員の業務として重要なものだといえる。担任の関わり方への肯定的なフィードバックをすることで，担任は“これでいいんだ”という心理的支えを得る。それにより，担任が安心してそれぞれらしさを発揮しながら子どもたちと関わっていけるようなコンサルテーションにすることを心がけている。

筆者は現在の幼稚園に勤務して10年以上になり，スタッフには入れ替わりもあるものの，行事の準備や保護者との細やかな連絡など，多様で責任の伴う業務に追われる中でも，先生がたが子どもの成長に携われる喜びを力にして，日々子どもに向き合っておられる印象を一貫して持ち続けている。共に子どもたちを育てていくチームとして，先生の関わりで感心したところや，困っている場合は次の対応の選択肢として考えられることなどを共有していくことが，発達相談員としての筆者のやりがいでもある。

最後に⑤については，「未就園児対象の保育グループや公開保育の日を設けており，地域の子育て支援のセンター的役割を担っており，保育カウンセラーも在園者のみならず，地域の保護者の相談に応じて（p. 27）」いるとされている。これについては，当園では保育心理職の資格を持つ先生が担当しているので，役割分担や連携の在り方を検討することが今後の課題となろう。

最後に，これら5つの役割に加えて，筆者が勤務している幼稚園がある自治体の特色として，市役所に子育て支援の専門部署があり，保護者の希望に応じて，3歳児健診などの様子から，フォローアップの形で巡回相談が定期的に行われている。巡回相談は心理を専門とする経験豊かな職員が担っており，可能な範囲で筆者の勤務日と巡回相談日を同日にするなどの形で連携し，対象園児の支援について，見立てや方針の共有を行っている。心理職としては一人職場でもあるので，このように施設を超えた連携をできると，同じ専門性を持ちつつも異なる立場から見立てや方針が提示されるので，視点が広がり，連携や支援の方向性も広がる。園児や保護者にとっては，メリットになるであろうし，筆者にとっては心強いものである。ただ，システムは自治体によって差があるため，全ての子どもに対して同じような取り組みができているわけではない部分は課題でもある。

３．幼小連携を視野に入れた活動の展開に向けて

ここまで，筆者の発達相談員としての実践について報告を行いながら，保育心理臨床における心理職の役割や意義を検討してきた。

以下においては，幼小連携における今後の展開について，考えてみたい。

幼保小連携において，上述の通り幼保小の架け橋期が重視され，接続期カリキュラムについても様々検討されている。このうち就学前の幼児が，円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに，幼児期の学びが小学校の学習で生かされてつながる前に工夫された5歳児のカリキュラムは，就学前はアプローチカリキュラムと呼ばれている。また，幼児期の育ちや学びを踏まえて，小学校の授業を中心とした学習へうまくつなげるため，小学校入学後に実施される合科的・関連的カリキュラムはスタートカリキュラムとして区別されている（国立教育政策研究所，2011）。幼稚園においては，年長児がそれぞれの小学校での生活にスムーズに移行できるような年長児全体の取組みと，在園時に何らかの支援を受けていた園児たちが，切れ目ない支援を受けられるよう個別的な支援の在り方をつないでいくような，マクロ・ミクロ双方の視点を備えたカリキュラム作りが必要とされているといえる。

アプローチカリキュラムに言及している日本の先行研究を整理した池田他（2021）では，多くの事例でカリキュラムの具体化への現場の苦慮が示唆されていることが指摘されている。筆者の勤務する幼稚園においても，幼稚園と小学校の交流や担当者間の情報共有など，細やかな連携を意識されてはいるが，年長クラスの担任やコーディネーターを務める先生が，自治体の作成した支援シートなども利用しながら，それぞれ工夫して担っている状況である。心理職として集団のシステム作りに寄与できる部分は限

られているものの，個別性を尊重した幼小連携の仕組みの検討は，専門性を活かせる領域だといえる。その一つの手がかりとして，久原他（2013）の研究がある。本研究では，小学校側のニーズに配慮しつつ，幼稚園での保育の蓄積を伝えられるような意義のある幼小連携のための就学支援シートの作成が試みられている。その際，幼稚園では一人一人の子を大事にした支援がなされており，エピソードなどでその子らしさを伝えることを重視するのに対し，小学校は全体のなかでの個の支援となっているため，その子の特徴や対応について整理されたポイントを求めており，これらの視点の違いをすり合わせながら，双方にとって意義ある支援シートを作成することの難しさが示されている。

そこで，今後の方向性として，幼稚園で支援を受けている子どもの発達検査や知能検査の結果について，子どもの日常での様子とのすり合わせや，結果を支援につなげる工夫について，臨床心理学的な視点を活かしていければと考えている。筆者はここ数年，親との協働的なウェクスラ―式知能検査の結果のフィードバック面接（Collaborative WISC-Ⅳ Feedback with Parents ： CFP）の研究に参加してきた（隈元他，近刊）。CFP は従来の検査のセッションにフィードバックを行うセッションを加えた全 2 回のセッションで構成されている。そして，フィードバックのセッションでは，保護者に検査の結果をわかりやすく伝えるだけではなく，検査の結果と保護者が生活のなかで感じている子どもの苦手なことや難しさをすり合わせ，その後にできる工夫を一緒に考えていく。その際重視していることは，なるべく保護者自身から工夫の具体案を引き出せるよう協働的なフィードバックを展開していくことである。この CFP で培った知見を用いながら，保護者や子どもに関わる関係者との連携や協働の在り方について検討していければと思っている。

４．おわりに

本稿では，筆者が携わってきた私立幼稚園での発達相談員の実践について，保育の場において心理職の果たす役割から改めて検討した。その中で，充実した活動を行えている部分と，十分に活動が展開できていない部分が明らかになった。また，今後の課題として，幼小連携での専門性の活かし方が見出された。引き続き臨床実践のなかで，地域に貢献できる発達相談員の在り方について，検討していきたい。

【文献】

原口喜充．(2017)．保育カウンセリングにおける保育者支援の方法とプロセスに関する一考察．心理臨床学研究，35（5）,503－513.

原口喜充・太田千景・浅井映美子・嶋野珠生・矢本洋子．(2022)．幼稚園側から見る発達相談員の有用性①－保育者に対するインタビュー調査から－．日本心理臨床学会第 41 回大会発表論文集，123.

池田孝博・杉野寿子・大久保淳子・鷲野彰子・中原雄一・伊勢慎．(2021)．福岡県立大学人間社会学部紀要，29（2），215－223.

久原有貴・七木田敦・小鴨治鈴・松本信吾・玉木美和・金岡美幸・関口道彦・大野歩．(2013)．　発達に課題のある幼児の就学支援シート作りに関する実践的研究－地域の小学校との連携を通して－．広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，41，141－149.

隈元みちる（編著）．心理アセスメントを生活につなげる協働的フィードバック－ウェクスラー式知能検査を用いた手引き－．印刷中.

国立教育政策研究所．(2011)．幼小接続期カリキュラム全国調査.
https://www.nier.go.jp/youji_kyouiku_kenkyuu_center/youshou_curr.html（アクセス年月日 2022 年 12 月 26 日）

坂上頼子．(2015)．第 2 章　保育カウンセリングの実際　滝口俊子（編著）子育て支援のための保育カウンセリング．ミネルヴァ書房，19－40.

山下直樹．(2011)．報告　市立幼稚園における保育カウンセリング．子育て支援と心理臨床，4，64－68.